



episode 8 おとうさんの人生の思い出が、家族の思い出に

投稿者 N.N さま(福岡県)

『にんじん』
せなけいこ 作・絵
福音館書店 1969年



2017年7月8日、九州豪雨で土砂に半分埋まった夫の実家から、『にんじん』が我が家にやってきました。

この絵本は、私の幼少期にも、母親に何度か読んでもらったことは覚えていますが、特に好きな絵本ではありませんでした。

私が好きだったのは、『しろくまちゃんのほっとけーき』や『ぐりとぐら』など、味を想像して、読んでもらうだけでわくわく楽しくなる絵本です。にんじんは好きだけれど、にんじんスープにそこまで魅力を感じなかったのか、大人になった今でも、絵本の存在くらいは覚えている程度でした。

その日の夜、寝る前の日課である絵本の読み聞かせの時に、「これ読んで」と、今日来たばかりの『にんじん』を息子が持ってきました。まだ少し砂がついている絵本のページをめくり、読み進めていくにつれ、いろいろな思い出が急に思い起こされました。

『にんじん』は、夫ときょうだい小さい頃に母親から読んでもらっていたのはもちろん、息子がおじいちゃんの家遊びに行った時にも読んでもらっており、子供たちの落書きもたくさんあります。私は結婚して数年ですし、夫の実家に1か月に1回帰るか帰らないくらいなので、夫とは比べものにならないほど、思い出は少ないはずですが、しかし、絵本が置いてあった場所、おじいちゃんとおばあちゃんの間で『にんじん』を読んでもらっていた時の息子の様子などを一気に思い出し、胸が熱くなったのです。

自分が生まれ育ってきて、思い出のたくさん詰まった家を失うことがどれだけ辛いことが、夫の近くにいたとしても、すべて理解することはできません。ただ、この絵本を見るたびに、思い出の一部は共有できるように感じます。

今回の出来事を、息子が大きくなって覚えているかどうかは分かりませんが、これからも『にんじん』を読み続け、家族みんなで思い出を共有できたらと思います。

〔絵本の日アワード in FUKUOKA 2021〕投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



おかあさん、絵本作家デビューする

1969年に福音館書店より出版された『にんじん』は、せなけいこ氏が絵本作家として登場した記念の絵本です。デビュー作は、この一冊だけではありません。『にんじん』にはじまる、『もじゃもじゃ』『いやだいやだ』『ねないこだれだ』の4冊を、「いやだいやだの絵本」箱入りセットで同時出版したのです。

19歳で絵本作家を目指し、童画家・武井武雄氏のもとで修業をはじめてから18年かけて努力を果したのです。すでに37歳で2児の母となっていました。せな氏が夢をあきらめなかったおかげで、私たちは「めがねうさぎ」や黄色い目のおばけに出会うことができるのです。今や『ねないこだれだ』は、絵本作家せなけいこの決定的な代表作です。

子どもに向けたコマーシャル絵本?!

『にんじん』が最初に誕生したのは、「ピーター・ラビット」や『ちびくろ・さんぼ』と同じく、自家製手づくり絵本としてでした。

きっかけは、ご息子がブルーナ作「うさこちゃん」を気に入って、「もっとほしい」とねだられたこと。その当時、「うさこちゃん」の日本語訳はまだ4冊しかなく、自分で続きを描いてみようとしたことを自伝的絵本『ねないこはわたし』(文芸春秋)で明かしています。

ポスターの裏を台紙にして、包装紙やチラシ、画用紙の切れ端で貼絵にし、ホッチキスで綴じた『にんじん』を完成させたのです。

実は、「うさこちゃん」のお話の続きを創ろうとした他にも、せな氏には、ある目論見がありました。せな氏も、夫である落語家の六代目柳亭燕路氏も、にんじんが嫌いだったので、子どもたちにはにんじんを好きになってほしいと願う母の愛による傑作なのです。これを「息子に向けたコマーシャル」と言っています。後日談で、ご息はにんじんを食べるようになるのですが、「この本のおかげかどうかはわからな

い」と、真実を述べるせな氏の人柄がうかがえます。

おかあさんのつくった絵本

それまで本は出していなくても絵の仕事をしていたせな氏は、福音館書店の編集者に、手づくり絵本のことを話したのです。こうしてホッチキス綴じの『にんじん』は編集者の目にとまり、プロの印刷・製本が施されて、「うさこちゃん」シリーズと同じ福音館書店より出版されたのです。それは、福音館書店の編集長が松居直氏の時代のことです。

せなけいこ氏の特徴である貼絵は、デビュー前から今に続くものです。武井氏に、「サインなしでもその人だとわかる絵本を描きなさい」と言われたとおりの手技・手法を構築したのです。

一生を決める絵本との出会いがある

絵本作家せなけいこの原点は、1歳のとき、ねえやが本屋でみつめてくれた武井武雄作『おもちゃ箱』(丸善)に出会ったことにあります。その18年後、武井氏の門をたたくわけです。「この絵本が私の一生を決めた」と述べる、せな氏の人生はドラマチックです。

修業時代、武井氏のもとで懸命に学び努力を重ねるのですが、どうしても師匠の絵に影響されてしまうことに悩んでいたとき、「どんなに努力しても武井先生の絵はあなたには描けません。でも、あなたの絵を武井先生は描けないんですよ」と松居直氏に助言されるのです。武井氏の指導と、松居氏の助言によって、せな氏は「独創性」にこだわって絵本づくりをするようになりました。

武井氏に師事して18年後にデビューを果たし、さらにその18年後には『ねないこだれだ』などの人気絵本で独創的な絵本作家としての地位を確立しました。その作品は、100年後も愛され続けることでしょう。

文献

- 1) せなけいこ：ねないこはわたし，文芸春秋，東京，2016.
- 2) KUMON：絵本作家せなけいこさん，mite[ミーテ] HP <https://mi-te.kumon.ne.jp/contents/article/1241/>